

孫はパリジエヌヌーその④

パリの「気質予報」

パリ路面電車から

古代ローマ時代、ローマ人がパリの人々をして野牽人を意味する「パリシー」と呼んだのがパリの語源だ。彼らは防衛に向くセーヌ川の中洲のシテ島に寺院を中心とする城壁都市を作った。寺院には付属



【写真右】東端のポート・ド・ヴァンセンヌ駅T3a線ホーム。すべての車両が停車し乗り換えが求められる。マスク姿は姿々【写真左】商業地帯を通るT3b線。多彩な人種が生活する路線。

の病院と軍隊があり当初はこの島に王宮もあった。シテが転じシティーとなった。寺院は2019年に消失したノートルダム寺院、病院はパリ市立病院、軍隊は警察本部として現在も残る。王宮はシテ島北側のセーヌ右岸に移転したルーブル宮だ。

パリでは1900年までは馬や蒸気を動力とするトラムが市民の足だった。それに変わる都市(メトロポリタン)鉄道が計画され、都市鉄道はパリの景観を守るため高架でなく地下に建設された。以後、メトロは地下鉄を意味する。パリは城壁都市だ。19世紀中頃シテ島を中心時計回りで20の行政区が置かれる。防御のための城壁は第一次大戦で航空機が使われたためその機能を失い取り壊され跡地に環状道路が建設された。

パリのテレビで「気質予報」がある。パリは高緯度だが西から温かい新鮮な

空気が入る。産業革命以降大気汚染が進み、新鮮な空気を求めて市の西端16区に高級住宅街が作られる。一方、パリの発展を支えた海外植民地からの移民は市の東、地価の安い商業地帯に住んだ。現在でも両者の平均年収の差は3倍で経済的に西高東低だ。

地球温暖化の象徴でもある「飛び恥」という言葉がヨーロッパではよく使われる。「CO2排出量の多い飛行機を避ける」という意味だ。それに伴って鉄道が見直されている。90年代からパリ首都圏の足として路面と専用線双方で運用可能な底床型のライトレールと呼ばれるトラムの建設が盛んだ。今回乗車したのは2006年(T3a線)12年(T3b線)に建設された城壁環状道路を走るT3号線で将来パリ循環線となる路面電車だ。

地下鉄と共通の一日券を購入しポート・ド・モントルイユからT3b線で時計回りに移動するが隣のポート・ド・ヴァンセンヌはT3b線の終点だ。そこでT3a線に乗り換え東端駅。レールは両線つ

ながっているが、なぜかの駅で全車乗り換えだ。ポート・ド・○○という駅がやたら多い。ポートとは城壁門のことで転じて港や荷役を意味する。パリを東から西に流れるセーヌ川の左岸(南側)には大

学や博物館が多い。南を走るT3a線には本を読むインテリ風の白人乗客も多く社内は静寂だ。乗降を繰り返しながら16区高級住宅街に続く西端終点まで行き折り返し東端駅へ戻る。ここでT3b線に乗り換え反時計回りに走る。セーヌ右岸の商業地帯に入る。15年、ISの同時多発テロ事件が起きた地域を通る。酔っぱらい、大声を出す人、買物袋の女性と多彩な人々が乗降する。有色人種がある車内だがテロ事件も頭をよぎったので少し怖い。雨も強くなつたのでパリ北西に位置するT3b線現終点で引き返す。

孫のソラの住むモントルイユも有色人種が多い地域。日本人のママもその一人だ。数年前、ママが住み始めた頃は夜、出歩けなかつたという。最近パリ中心部の家賃が値上がりし、そこから移り住む

人も増え中級住宅街に変わっていったが、この一日旅わりつつある。旧植民地からの移民や外国人がフランスの経済成長を支えていることは数字ではわ

國松勝作品展

民家や日曜市などを活写



芸西村・筒井美術館で開かれていた作品展を見学してきました。絵画には全く疎いのですが、民家を描いた作品や、日曜市の風景を描いた作品などがあって、心とまりました。ずっと前に新聞部の合宿や社会科の研究会で訪れたことのある室戸市吉良川町の歴史的建造物群保存地区の民家の絵では黒漆喰の家や白壁、土蔵など昔ながらの街並みが鮮やかに描かれていました。また、再開で消えた旭町や中須賀町の長屋や廃屋などの様子も、かつて親戚のおじさんの家に宿泊しました子どもの頃を思い出して懐かしく感じました。入口に飾られていた大きな

カラスの絵は何だ！と思つたら、タイトルが「ウクライナに平和を」で、カラスとウクライナ国旗のコントラストに強烈なメッセージ性を感じました。余談ですが、1階の民具展示コーナーでは、何故かアホウドリの剥製が！添えられた新聞記事によると、遠洋マ

グロ船から持ち帰られたのではないかとのこと。アホウドリについては、社会科の授業で環境問題を扱った時に必ず取り上げて長谷川博さんの著書「よみがえれアホウドリ」アホウドリからオキノタユウへ」などを紹介してきま



ドリに出会えた偶然に感謝です。(大鳥克人)